



ロンドンのシティーに建つ「ロイス保険ビル」(競込研司氏撮影)

「どうも愛らしい友人の顔に
きたオオキ」

一九八七年に行われた英国ナショナルギャラリー増築の設計コンペで一等に選ばれたP・アレックスに対して、チャールズ皇太子が送ったコメントである。この一言がきっかけで、反対派は進退をきき込み、三ヶ月かかって撤回していったコンペが振り出しに戻ってしま

た。

伝統者の皇太子が現代建築にいちばんをつづけるのは、キリスでは長く知られており、伝統を重んじる多くのキリス人はそれを愛し込んでいようと思える。例えはテムズ河畔の各近代建築、国立劇場も彼に言わせれば「ロンドンの心臓」でできた原力発電所なのである。しかし、ナショナルギャラリーのコンペの時は大問題になった。すたもなかのあげく、上位三案にも入らなかったR・ベンチュリとの保守的な案を採用となり、現在の特徴の無い建物が増築されたのである。

「を主張することにより民主的ではなくなる、伝統に固まるあまりに創造的なが排除される」という論議(き)である。これは大変な反響を呼び、回紙では用印の私函も送ってなさいである。この時の世間調査では90%の皇太子の見方は受け入れられるし、伝統派の

夫 健夫

運



建築家

むらじ・行ね 一九五六
東京都生まれ。多摩美術大
卒。東京都立文芸学部に勤務
す。建設省設計部勤務の後
九一年に退職、ロンドンのA
校の助手も務めた。著書に
「学校建築別々事例集」共
著など。

イギリス人：建築への見識

優勢を示した。

の中で、興味深いのは、一般の人々の建築観がある。普段の生活の中で建築の話題が出ることも多く、また専門家がなるのにも驚くこととなり、住環境に対する意識が高く、伝統的な街並みを大切に、これが結果として各都市の特徴ある住

わせているのである。

このことは建築も同様で、先ほどのロジャースが設計したロイス保険ビルにその例えを出ることができ、これはロンドン中心部の伝統的な石造建築物の中に對照的に建つ現代のハイテクビルだが、この案がコンペに勝った時は伝統派の

環境を削ぐ(く)り出ていると言える。

これはもちろんナショナルトラストやインフラストラクチャー等のような団体による活動や建築規制による効果もある。また十七十九世紀の歴史のな建物に囲まれ、建築におのずと興味をわく住環境の理由もある。

同時に興味深いことは、この一見保守的に見える国がヒトリスを生み、ミニムスカーやパンクファッションなど最前線の流行を生み出してきた事実である。つまり新しいものを受け入れる度量と寛容さを持ち合

に創造的な現代建築を生み出したことである。

この春、五丘近くに住んだイギリスから帰国した、関西新築に入り大阪から京都に帰ったのだが、道路から見る街並みに特徴を感じることで驚き、その多さを誇った。大阪にはかつて「江戸」という路地がたくさんあり、木造家屋による独特な路地空間があった。いずれも近代化によってその多さを失った。これらは都市のコンテクスト(文脈、前例)を捉え(とら)えずに、古いものと大げなものを一緒に置き替えて現代化した結果と言えよう。

この建物は完成と同時に一躍ロンドンの観光名所となり、今ではロンドンに好まれる建物の上位にランクされている。これは明確に保守的な見識が勝つあり、それによって建築家が勝たれ、伝統を乗り越える質の高い現代建築を生み出したと言え、つまり、一般の人々の歴史への深い洞察を住環境への高い意識が、伝統的な街並みを生むと同時に

「文化の厚みと創造のエネルギー」を感じさせる、このコンテクストは、日本の都府県等の一つのヒントとなるのではないだろうか。